

過ちを繰り返さないために

～ オフィシエンチム(ドイツ名;アウシュビッツ)訪問レポート

テーマ概要: オフィシエンチム(アウシュビッツ)訪問を通じて、ホロコーストの事実を知り、人類が同じことを繰り返さないための仮説を描く

日程&コース: 2007年9月15日(土) ポーランド・クラクフよりバスで2時間

目次:

- 1) 何が起きていたのか ~ 収容所の事実を知る
- 2) なぜ起きてしまったのか ~ 事実を基に原因を探る
- 3) 私たちは何をすべきなのか ~ 繰り返さないために

1) 何が起きていたのか ~ 収容所の事実を知る

訪問を前に

私たちは4グループに分かれて訪れていた欧州各所から、訪問前日の夜にポーランド・クラクフに集まった。当初より、全体で集まる場所はこのクラクフ、と決めていた。なぜなら、ここは、アウシュビッツ強制収容所の最寄の都市であり、ソーシャル活動の大前提である「今、生かされていること」の意味を振り返り、考える上で、この地が欠かせない場所であると考えていたからだった。

このような意識のもと、集ったメンバーだったが、一部のグループが航空トラブルに遭い、前日入りの予定が当日の朝に電車で到着する、という波乱の幕開けとなった。

しかしながら、無事全員が揃うことができ、9月15日の朝に、ホテルからバスに搭乗し、アウシュビッツ強制収容所に向かったのだった。

事実と向き合う前に

私たちが収容所に足を踏み入れると、唯一の日本人現地ガイドである中谷剛さんが迎えてくれた。彼は、私たちが様々な事実と向き合う前に、ここで起きたことを、第三者の見解を前提に捉えるのではなく、自分自身の「感性」で捉えて欲しい、と伝えてくれた。

この場所で、数多くのユダヤ人をはじめとする人々が虐殺された事実に間違いはない。しかし、その捉え方は様々である、という前提が、中谷さんの伝えたい意図の中に存在していた。いわば、物事の本質は、感性で感じ取る部分と、あらゆる立場からの客観的な見方を統合しなければ見えてこないということを伝えてくれた。



(現地ガイドの中谷さん)

例えば、中谷さんから伺った話の中に、このようなものがあった。ユダヤ人虐殺を行っていたドイツ軍将校たちは、戦後の裁判において、「なぜ国のために、命令に従って行った行為が罰せられなければならないのか」と嘆いたという。また、ドイツ軍将校は、多くのユダヤ人を大量虐殺しているその収容所の目と鼻の先に住居を構え、そこでは、自分の家族に対する愛情を十分に注いでいた。

この事実は何を物語るのだろうか。それは、人間が人間を虐殺するという行為や事実に対する立場や境遇がもたらす捉え方の違いであり、一方はこの事実を、信じられない、あってはならないこと、と捉え、また一方は、必然の事実であり、当時の社会において必要であること、と捉えていたことの表れであると思われる。

もちろん、人命は尊いし、何者もこうした事実を繰り返してはならない。だからこそ、そのためにも、ここで起きた事実を、行為を行った側の人間の立場と、被害にあった側の人間の立場、その時代の環境を察し、そこに、人間が有する特別の能力である感性を加えながら判断して、仮説を組み立てていかなければならないのだと思うのである。中谷さんは、はじめにそうした慎重な事実との向き合い方を私たちにしっかりと教えてくれた。

強制収容所の概要

私たちが訪問した強制収容所は2つに分かれている。一つは、第一強制収容所であるアウシュビッツ強制収容所。もう一つは、第二強制収容所であるビルケナウ強制収容所だ。

ナチス・ドイツは第二次世界大戦下において、ポーランドを占領すると、オフィシエンチム市を「アウシュビッツ」とドイツ語で呼び、その地に強制収容所を建設した。ここはユネスコにより、1979年に「負の世界遺産」に認定されている。

この強制収容所は、最初からユダヤ人絶滅を目的として建設されたのではなかった。元はナチス・ドイツに対する抵抗勢力や政治犯を収容することを目的としていた。しかし、後にその機能は絶滅収容所と化していくことになった。

ここには推計で150万人が送り込まれ、そのうちの9割以上の人々が生きて帰ることができなかったとされている。しかし、あくまで推計であり実際は定かではない。収容された人は、ユダヤ人、政治犯、ロマ・シンティ(ジプシー)、同性愛者、聖職者、さらにはこの人々をかかまった人であった。

強制収容所の事実 システムの象徴

中に入ってみると、アウシュビッツ強制収容所は意外に狭く感じた。「ARBEIT MACHT EFREI (働けば自由になる)」と書かれた入口を横目にしながらまっすぐ歩いた収容所の外に、「ガス室」があり私たちはまず初めにそこを訪れた。



中は暗く、壁に覆われていた。天井には穴がいくつかあけられており、そこからは、毒ガスが上から降ってきたのではなく、殺虫剤、殺鼠剤の固形物が落とされた。その固形物による死因は、毒性による死亡ではなく、「窒息死」だった。しかも、即死ではなく、息をひきとるまでに15分かかっていた。そして、およそ3時間後には死体を外に運んだ。

(アウシュビッツ強制収容所 入口)

つまり、作業がスムーズに行くように、毒性が強すぎないガスが選ばれていた。毒性が強いと、その後の作業が迅速に行えないからだ。そのガス室の広さは25mプールぐらいであったと思う。



ここで、多くの人が死の宣告を受けた後、連行されて、立ったままなくなったという。母親に抱きかかえられたまま命を失った子供も数多くいた。ガス室の足元にはそこで窒息死した人を運ぶためのレールが敷かれていて、そのレールの向かう先に、数台の焼却炉があった。外にはそこで焼かれて生じた煙が浮き上がる煙突が立っていた。

(ガス室の入口)

このガス室は、どのような目的でつくられたのか。それは、虐殺をシステム化することだった。この当時、街中では、多くのユダヤ人が虐殺されていた。しかし、虐殺する側のドイツ軍将校たちも、目の当たりにする虐殺においてかなりのストレスがたまっており、そのストレスを解消するためにも、ガス室のようなシステムが用意された、とされている。

つまり、殺す側にも、殺される側にも、「死」を感じさせないシステム。それが、ナチス・ドイツが作りあげた強制収容所であったといえる。

また、ガス室の中で作業をしていたのは、ドイツ軍兵士ではなく、同様に連行されてきたユダヤ人であった。ドイツ軍は、ユダヤ人の生き残る道として、こうした作業を課した。彼らは、それしか生きる道がなかった。自分たちの同胞の死体を焼いている、その時、その瞬間しか、生きている保障がなかった。そうした「生きたい」という根本的な人間心理を操るやり方も、ナチス・ドイツのシステムの一つであった。ここで目撃したガス室は、ナチス・ドイツが作りあげた、あってはならないシステムの象徴といえる場所だった。

強制収容所の事実 希望と共に

次に私たちが訪れた先は、その頃の収容所の実態を明らかにする様々な「事実」であった。その事実は博物館の中に展示されていた。中でも印象的だったのは、この強制収容所に連行されてきた人々の持ち物であった。彼らは食器や洗面器などの日常生活で使う道具をこの収容所に持ち込んだ。もちろん、それを使う瞬間は与えられなかったが、虐殺されたユダヤ人が何を考え、どんな希望を持ってこの場所に来たのかが伺える事実だった。

ドイツ軍は、その頃、ユダヤ人を強制収容所に連行する際に、「再住化計画」であることを謳っていた。つまり、強制収容され、虐殺されるのではない。ドイツの政策に基づいて、ユダヤ人は、住む場所を変えるのだ、という伝達がされていた。だからこそ、ユダヤ人たちは、家族で移住を決意した。ドイツ軍が用意した強制収容所行きの切符を握り締めて、新生活にささやかな希望を抱いた。そして、何日もかけて、電車で揺られてたどり着いたのだった。

この事実も、ナチス・ドイツによる、人間の心理を利用して、虐殺をスムーズに進めるためのシステムであった、ということをも裏付けるものだといえる。持ち込まれた食器や家財道具は、全て勘定され、金や銀、銅、といった素材の名称と数量に置き換えられ、本部に報告された。そうした資源はドイツ軍のものとして再利用された。こうして利用されたものは、家財道具のみならず、衣類、アクセサリーはもちろん、毛髪にも及んだ。希望とともに連行された人たちの命もろとも全てが、その完成されたシステムの「成果」の一部となってしまったのだ。

強制収容所の事実 立ち向かった勇氣

博物館を後にした私たちが次に立ちどまったのは「死の壁」だった。この壁の前では、ナチス・ドイツの体制や虐殺に反抗した人々が銃殺された。私たちは、少し距離を置いて、この壁と向き合った。勇敢な記者、社会学者、聖職者らがこの場所で勇氣と引き換えに命を失った。



一体どんな気持ちでこの壁の前に立ったのだろうか。それは決して巨大な力に屈する弱い心ではなかったはずだ。

(死の壁)

強く、そしてずっと遠くを見ていたはずだ。多くの人への愛情を胸に、希望を託してこの壁の前に立ったはずだ。そう思うと、今、こうして壁の前に立たせていただいていることを素直に感謝しようという気持ちになった。

壁の前には、今でもなお、勇氣を持って立ち上がった人たちに対する花束が積まれていた。ここで感じたこと、それは、勇氣だけに頼る社会ではダメだということ。私たちは勇敢な人の勇氣だけに頼るのではなく、そうした人の勇氣を必要としない社会をつくらなければならない。こ

ここに立った人たちの勇気に報いるためにはそれしかない、と強く思った。

2) なぜ起きてしまったのか ~ 事実を基に原因を探る

ここからは、実際にアウシュビッツで起きた事実を時間を越えて目撃した私たちの目線から、なぜこうした悲しい出来事が起きてしまったのかを考えていこうと思う。

原因探求 情報操作

前提として共有しておきたいのが、当時、アウシュビッツで起きていた事実は、世界が知っていた、ということだ。ヒトラーは強制収容所建設を世に伝えていた。また、ユダヤ人を絶滅させる計画も、ドイツの政策のひとつとして宣言していた。当時の世界は、この強制収容所とそこで起きているだろう事実を知っていたはずだった。しかしながら、大量虐殺をやめさせることはできなかった。私たちの国、日本は、ドイツとの三国同盟下にあった。そう考えると、間接的にこの事実を許容してしまっていた、といえないわけでもない。

ではなぜ世界が知っていたのに、こうした出来事とめることができなかったのか。それは、思うに「全てを知らなかった」からだといえる。世界が知っていたとはいえ、事実は目の当たりにしていない。耳で聴くのと、目で実際に目撃するのでは、把握の質に違いがある。

また、ヒトラーは、全体をシステム化することで、「分業体制」を敷いた。つまり、各地から運んできてくる人、死を告げる人、ガス室に連れていく人、殺害する人、死体を運び償却する人、持参品を勘定して報告する人…、全てがつながっているものの、全てはバラバラに行われた。だからこそ、全体を把握している人はほんの少数だった。こうしたシステムが事実を分断することで、起きていることを把握し、感じ取る機会を奪うことにより、真実を見えなくしてしまった。



(強制収容所内に差し込む光)

もちろん、ジャーナリズムが存在していなかったわけではない。しかし、限界があった。今の世に、ここで起きた悲惨な事実を伝えてくれる少数の写真は、勇敢な人の手によって、死を覚悟で撮影されたものだ。

当時、全体が統制化にあり、情報はコントロールされていた。それらは、常に人々の「生きたい」という根本的な欲求と引き換えに、コントロールされていたわけだ。

原因探求 想像力の欠如

2つ目の原因として「想像力が失われたこと」をあげたい。当時のナチス・ドイツは、非合法で政権を獲得したのではない。決められた段階を踏んで、当時のドイツ国民の圧倒的支持を受けて第一党になり、ヒトラーは総統になった。裏返せば、この瞬間に、国民がヒトラーを選ばなければ、ここであげた出来事は起こらなかった、ということになる。

では、なぜ国民はヒトラーを選んだのか。当時、ドイツは第一次世界大戦に敗れ、多額の賠償金の支払を義務付けられ、その支払によって財政的に困窮していた。そうした背景のもと、ヒトラーは国民の支持を得、民意を統合する政治目的で、「ゲルマン民族の優越」を訴え、「反ユダヤ主義」を掲げた。こうした「二極」の論理を武器に、ヒトラーは支持を広げ、権力を増大していき、国民はそれに従っていった。

ここで言及すべきは、国民がこうした論理の真相を見抜き、ヒトラーの用意したフレームのみで考えずに、想像力を働かせて違うドイツの未来を描いていれば、世の中は全く異なっていたという仮説だ。事実、先見の明のある有識者や、人間の心を深く探求している学者などの一部には、豊かな想像力を働かせて、体制に反抗した人もいた。しかし、大衆の意見には敵わなかった。ヒトラーの存在は大衆の政治的無関心が及ぼした結果、ともいえよう。

残念ながら、当時の人々の想像には限界があった。今の世の中でさえ、隣国の災難を想像するにも難しい。当時の人たちであればなおさらであったと思われる。

原因探求 心理コントロール

3つ目の原因として、先にも述べたが、ナチス・ドイツによる巧妙な心理面でのコントロールがシステムをより強固なものにした、と考えられる。

具体例として、

- ・連行する際は、あえて列車の切符を渡し、ささやかな目的地への希望を抱かせる
- ・収容所の中ではジプシーを同居させ、偏見的優越感を与え気持ちの安定を図る
- ・全て分業体制にすることで、死を感じさせない仕組みをつくる
- ・生きたいという欲求と引き換えに労働を課す
- ・ゲルマン民族の優越と、反ユダヤ主義をかけあわせることで、偏った民意を構成する



などがあげられる。全て人間が振り切ろうとしてもなかなか振り切ることができない心理面での「弱さ」「脆さ」を操った仕組みであったことが分かる。

(解放後、ドイツ軍将校が処刑された処刑台)



特に心に響いたのが、ビルケナウ強制収容所で見た2つの事実だ。一つは、子供のための収容所。そこには、入口に絵が設けられ、中の壁面にも子供が書いた絵が存在していた。こうした行為が子供を落ち着かせ、希望を抱かせる上で必要だったのではないかと思う。

(子供たちが残した収容所内の壁画)

この事実からは、そこにいた子供たちの無邪気さと、ナチスの残酷さのアンバランスさが際立っており、当時のシステムそのものの本質を現している感じがした。

もう一つは、収容された人のために用意された洗面所だ。一つひとつの洗面台に、石鹼を置く場所が用意されていた。石鹼は支給されないのに、である。これは、ドイツ軍の統制心理を物語る一方、そこで顔を洗う人の、ささやかな希望を感じさせるものであった。



(石鹼置き場が用意された洗面台)

以上、3つの原因仮説を述べた。

では、私たちは、今後、こうした教訓のもとに何を考え、実行していかなければならないのか。それを最後に述べていきたい。

3) 私たちは何をすべきなのか ~ 繰り返さないために

これまでの事実と原因を踏まえて、私たちがすべきことは何か。ここで起きたことは、時代が生んだ負の遺産であることは間違いない。その上で、私たちが、歴史と向き合うときに忘れてはいけないことがある。それは、事実をしっかりと受けとめ、繰り返さないために何をすべきかを考えることだろう。

現地ガイドの中谷さんは、日本人の若者が訪れないことを憂いていた。ドイツの若者は数多く訪れ、しっかりと事実と向き合っているという。今、私たちに出来ることの第一歩は、事実と向き合っていくことに違いはない。その上で、思考し、感性を頼りに想像していくことが必要とされている。

ヒトラーの創りあげたこのシステムは、人間心理の弱さ、脆さをついた皮肉にも完成されたものであった。では、人間は強くならなければ、同じことを繰り返してしまうのだろうか。確かに、強くなっていかなければならない。それは、この世から少しでも偏見をなくし、真に大切にされる本質を見抜き、考え抜くことだ。そして、勇気を振り絞って、間違った事実と立ち向かっていくことだ。

一方で、こうした人間の力だけに頼るだけでは、過去に勇気を振り絞った人々、被害を受けた人々への報いとして物足りないだろう。同じことを繰り返さない仕組みをつくっていかねばならないと思う。その仕組みとは何だろうか。それは情報を公開する仕組みであり、公開された情報に反応し、正しい結論を導く仕組みではないだろうか。ジャーナリズムの存在意義は、こうした点からとても大きい。しかしながら、報道する事実の選別、報道の仕方、その報道の受けとめ方は、全て人に委ねられている。私たちは、こうした点において、常に偏見や無関心に陥らないようにしていかなければならない。

こうした意味から、最後のよりどころになるのは、ただ唯一、人間が有する能力である「想像する力」であると感じる。人のことを思い、未来を思い、真実を思う。一人ひとりが感性を磨き、想像力を豊かに他人のために発揮する状態を長い年月をかけてつくっていくことが、歴史が私たちに求めていることではないかと思う。



(ビルケナウ強制収容所に向かう列車の引き込み線路)